

論語

(大人用読みと解説)

監修 石井 勲



論語(大人用)

1 2 3 4 5

ひとのせいやちよく

一、「人之生也直」人の生や直

人は生まれつきは真つ直ぐなものである。どんなに邪悪な人も初めから邪悪だったのではない。人は正直に生きていくのが自然で、美しい。それなのに邪悪な道に足を入れると、ついそれに慣れ、ますますその道から抜け出せなくなってしまうのである。「君子は危うきに近寄らず」と言うのはそのためである。

1 2 4 3

らしや

みず

たの

二、「知者楽水」知者は水を樂しむ

賢い人の頭は水のように流動的で絶えず働いている。賢い人は変化して止まらない水が好きである。仁者が山を樂しむのに対して、知者は水を樂しむと言つて、仁者(聖人)と知者(賢人)の違いを述べた言葉である。

1 2 4 3

じんしゃ

やま

たの

三、「仁者乐山」仁者は山を樂しむ

仁者は富貴や榮譽を求めて心を動かすようなことはしない。心は山のように不動である。それで仁者は不動の山を好む。「知者は水を樂しむ」と言うのに対する言葉で、知者(賢人)と仁者(聖人)との違いを述べた言葉である。

1 2 3

4 5 6

らしや

うご

じんしゃ

四、「知者動、仁者靜」知者は動き、仁者は

しず

静かなり

賢い人は臨機応変の才があつて機敏に事を処理するが、仁者は無欲であるから心を動かすことがない。「知者は水を樂しむ、仁者は山を樂しむ」に続く言葉。賢く立ち回つて事をうまく処理するのが知者で、じつとしていてうまく事を処理するのが仁者である。

1 2 3

4 5 6

らしや

たの

じんしゃ

五、「知者樂、仁者壽」知者は樂しみ、仁者は

いのちなが

壽し

賢い人は能力が高いので何でも樂しんで物事を処理する。仁者は世俗に心を使わないので自然と健康を保ち、長生きをする。これに対して、愚かな人は、能力が低いのに出来ないような物事を望んで苦しんで働くので、ストレスが多く、病気になるまで長生き出来ないものである。

六、「述而不作、信而好古」 述べて作らず、

信じて古を好む

昔から伝えられて来た物事を明らかにしてこれを後に伝えることに努めて、新しく作り出すことをしない。昔から伝えられた物事は信頼できて、私はそれが大好きなのである。孔子の言葉。孔子は後世に多くの教えを残したが、それは昔の人々の教えであって、自分が作り出したものではない、と言うのである。

七、「学而不厭」 学んで厭わず

いくら学んでも決して飽きるということはない。学べば学ぶほど、もっと知りたいたいという気持ちが強まるからである。孔子が自分について述べた言葉。今まで解らなかったことが、学ぶことによつて解れば誰でも嬉しくなるはずである。だから、学ぶことが苦勞でも、解った時の楽しさを心に描いて努力するのである。

八、「拠於徳、依於仁、遊於芸」 徳に拠り、仁に

依り、芸に遊ぶ

人が生きて行くのに拠り所となるのが道徳である。徳目には仁・義・孝・悌・忠・信・恭・敬などがあるが、最も大切なのは仁である。道徳だけでは堅すぎるので、芸を楽しむ余裕が必要である。礼・楽・射(弓を射る方法)・御(馬を操る方法)・書・数を六芸と言う。

九、「不憤不啓」 憤せざれば啓せず

理解を求めてもう少して解るといふ手前で考え苦しんでいる状態が憤。孔子が教育法を説いた言葉。学問は自分の力で進めて行くものである。だから、孔子は弟子が憤の状態に達した時に初めてヒントを与えた。そこまでやらない者、やる気の無い者には教えることをしなかつたのである。

十、「發憤忘食」 發憤して食を忘る。

孔子が自分について述べた言葉。学問を追及し熱中している時には食べることも忘れてやった。求める気持ちが強いので、その他の事には考えが及ばないのである。楽しい遊びに熱中した時に、食べる事も寝る事も忘れて遊ぶとい

う事は誰でもあるが、学問でもそうありたいものである。

6 5 1 2 3 4 かい りよく らん しん
十一、「不語怪、力、乱、神」怪、力、乱、神を

かた 語らず

孔子について弟子たちが述べた言葉。奇怪なこと、腕力、世の乱れ人の乱れ、神秘的なことについて語りたがるのが世の人の常であるが、孔子は極めて当たり前の事しか口にしなかった。興味があるだけで益の無い話や人を惑わすような話を避けて、道徳や学問について語ったのである。

2 1 X 3 4 X じん ほつ じんいた
十二、「欲仁、斯仁至矣」仁を欲すれば仁至る

仁は最高の徳であるが、決して実行し難いものではない。仁でありたいと心から望むなら、その瞬間にその人の心は仁になるのである。問題はその心をどれだけ保ちつづけるかである。一時間の仁者から一日の仁者へと努力することである。

1 2 4 3 くんし どう
十三、「君子不党」君子は党せず

立派な人間は一党一派に片寄った言動はしないものである。誰に対しても私情にとらわれず公平である。党派に属している人は、党としての意見が間違っていると思ってもそれを間違っているとは言いにくいものである。だから君子は党派を作らないのである。

1 2 3 4 し おん ほけ
十四、「子温而激」子は温にして激し

子は先生という意味。ここでは孔子のこと。孔子は温和な人であるが、その温和さの中にもどこか厳しさを秘めていた。人は温和だけの人も、厳しいだけの人も好くない。優しさの中に厳しさがあり、厳しさの中に優しさがある、というのが立派な人物なのである。

1 2 4 3 い たけ
十五、「威而不猛」威ありて猛からず

孔子について述べた言葉。孔子は威厳が備わった人であるが、猛々しさは無かった。威厳というのは、立派な人に備わった、狎れ狎れしく近寄りにくい、圧倒されそうな雰囲気のこと。孔子の威厳は自然に身に備わったもので、人が柄が温和だったので猛々しさが無かったのである。

1 2 3 うやうや やす
十六、「恭而安」恭しくして安し

孔子について述べた言葉。孔子は態度が恭しく慎み深かったが、堅苦しい所が無く、伸び伸びとして見えた。普通、礼儀正しい人は堅苦しく感じられるものであるが、孔子はその反対に伸び伸びとして見えたのである。その心の底に人に対する優しい気持ちがあるからである。

215X34 のう あう と
十七、「以能問於不能」能をもって不能に問う

すでに高い能力があるのにさらに広い知識を求めて誰にでも質問し教えを求めぬ。曾子が自分の勝れた友人を表した言葉。「問うは一時の恥、知らぬは一生の恥」という諺があるが、質問するということ事はなかなか恥かしくて出来ぬものである。まして、自分より能力が低い人には出来ないものである。

132 あ な
十八、「有若無」有れども無きがごとくす

学問や知識があるのに、それが無いかのように謙虚に行動する。荘子が自分の勝れた友人を表した言葉。世の中には知ったかぶりをする人、自慢する人が多い。「知る者は言わず、言う者は知らず」の諺通り、知者は知ったかぶりをしないものである。知ったかぶりをして得意そうに言う者は知識の浅い者である。

1X32 おか こ
十九、「犯而不校」犯さるれども校せず

人から無礼な仕打ちを受けても、それに抵抗しない。愚か者を相手にすれば、自分もそれと同列になるからである。曾子が自分の勝れた友人を表した言葉。殴られれば殴り返したい、悪口を言われれば悪口を言い返したいというのが人情である。しかし、犬に吠えられて吠え返す人はいない。人間より劣った生き物と思うからである。

12345 にんおも みちとお
二十、「任重而道遠」任重くして道遠し

役人の任務は重大であつて、最後までやり通すのであるからその道のりも遠大である。曾子が役人としての心構えを述べたもの。役人は世の中の人々の幸福を身に背負っているのであるから、その任務は重く大きい。その上その任務は役人である間は続くのであるから大変である。その覚悟が無くては役人となるべきではない。

1243 じんしゃ じん やす
二一、「仁者安仁」仁者は仁に安んず

ただ仁の道にかなった行いだけを求めてそれに満足して、ほかに何も求めない人こそ真の仁者である。仁者とは人として最も尊敬すべき立派な人のことだ。

ある。仁者は他人の幸福を願って、自分の利益を考えずに人のために尽くすのである。

1 2 4 3 らしや じん り
二二、「知者利仁」 知者は仁を利とす

「情けは人のためならず」仁を行うことは自分の利益になることを知って、そのために仁の道を行う人は仁者ではなくて知者というべきである。自分の利益だけを求めて他人の利益に奉仕しない人は決して賢い人とは言えない。それは知者ではなくて愚者というべきである。

1 2 3 4 5 6 X 7 X ふうし みち ちゆうじよ
二三、「夫子之道、忠恕而已矣」 夫子の道は忠恕のみ

夫子は先生という意味の言葉で、孔子を指す。孔子が目指した人の道とは、忠(真心)と恕(思いやりの心)である。忠恕は仁の根底をなす徳目である。忠は真心一筋に尽くす心のこと。恕は相手の立場を自分の事のように考える思いやりの心のこと。

2 X 1 3 5 X 4 げん とう おこな びん
二四、「訥於言而敏於行」 言に訥にして行いに敏

訥は言葉が内にこもってうまく話せないこと。訥弁。口は下手でも、実行力のある人が立派な人である。反対に、口で立派なことを言ってもそれが実行できなければ、軽蔑されても仕方がない。口より実行が大切である。

1 3 2 4 6 5 とく こ かなら となり
二五、「徳不孤、必有隣」徳は孤ならず、必ず隣あり

徳は道徳、人の道。ここでは仁者の意味。仁者は決して孤立することはない。必ず仲間があらわれる。自分の利益しか考えない人は誰からも信用されず、結局孤立せざるを得ないが、他人の幸福を願う仁者の周囲には自然と人が集まるものである。

2 1 X 4 3 いち き じゆう し
二六、「聞一以知十」一を聞いて十を知る

物事の一端を聞いただけで、それに続く二から最終の十まで、すべてを理解してしまうという知者を表現した言葉。孔子が自分より賢いと言った弟子の顔回を表した子貢の言葉。子貢は、自分は一を聞いて二を知る程度だが、顔回は一を聞いて十を知る人だといった。

1 2 5 4 3 X きゆうぼく ほ
二七、「朽木不可彫也」 朽木は彫るべからず

腐った木では彫刻できない。それと同じように、やる気の無い人間は教育でできない。口は達者だが実行力の無い弟子の宰予を表した孔子の言葉。宰予

は三千人の孔子の弟子の中でも一、二を争うほどの才智をもった人であるが怠惰な所があったので、孔子はこのように評した。才智は劣つても、やる気のある人間を孔子は愛したのである。

4312 かもん は
二八、「不恥下問」下問を恥じず

真に学問を好むものは、疑問がある時は、自分より年下であろうと、自分より地位の低い人であろうと、恥かしいと思わずに質問するものである。孔子は、知っていることでも、確実を期するために、よく質問した。「問うは一時の恥、知らぬは一生の恥」という諺もある。

2134 おのれ おの きよう
二九、「行己也恭」己を行うや恭

自分の行いを謙虚にする。恭の反対は驕慢。斉国の宰相鄭子産を評した孔子の言葉。身分が高いと驕慢になりがちだが、子産は地位が高くなるにつれてへり下ったという。昔から「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という諺がある。子産は正に稲穂のような人であった。

1234 ふたた か
三〇、「再斯可也」再びすればここに可なり

深く考えずに実行するのいけないが、考えすぎてなかなか実行しないというのも可くない。考え過ぎの傾向のある季文子を評した孔子の言葉。二回考えて良いと思ったらそこで実行に移すのが可い。世の中には、考えているばかりでなかなか実行に移さない人が多い。実行しなければどんなに立派な意見でも役には立たないのである。

4312 きゆうあく おも
三一、「不念旧恶」旧悪を思わず

孔子が伯夷と叔斉を評した言葉。二人は他人の過去の悪事は忘れて思い出そうとしなかった。そうすれば、人を怨むことも人から怨まれることもないからである。しかし、たいていの人は他人の悪事をいつまでも覚えていて怨みに思つて仕返しをするものだから、人からも怨まれるのである。

321 ぜん ほこ
三二、「無伐善」善を誇るることなし

善い事をすればつい誇らしい気持ちになるものであるが、善い事を当然のようになしたという顔回の気持を述べた言葉。悪いことをすると気持が悪いが、善い事をする気持が良い。だから、人は善い事をした方が得なのである。その上、善い事をする人は他人から自然と尊敬されるから一層気持が好くなる。

3 2 1 ろう ほどこ
三三、「無施勞」 勞を施すことなし

骨の折れる仕事を他人に押しつけることをしない。「善を誇ることなし」と共に、顔回が言った言葉。人は苦勞して始めて立派な人になれる。だから、骨の折れる仕事を他人に押しつけず、自分から進んでするようにしたいものである。諺にも「艱難汝を玉にす」とある。

2 1 3 5 4 けい い かん 介 おの
三四、「居敬而行簡」 敬に居て簡を行う

自分は礼儀正しく行いを慎ましくするが、他人の不作法については寛大に見て咎めない。君主の徳があると言って孔子が誉めた弟子の仲弓の言葉。世の中には、他人の不作法は厳しく咎めながら、自分の不作法は平気でする人が多い。

3 2 1 いか うつ
三五、「不遷怒」 怒りを移さず

腹が立つことがあっても、それを胸の内に収めて外に出さず、その怒りを他の人に移すことがなかった。これは顔回の事を評した孔子の言葉。人は腹を立てるとつい八つ当たりをして、何でもない事にも腹を立てるものである。腹が立つてもその場で収めて、忘れるのが好いのである。

3 2 1 あやま ふた
三六、「不貳過」 過ちを二たびせず

人間である以上失敗はつきものだが、その失敗を二度としない。顔回の事を評した孔子の言葉。失敗は成功の基とも言われている。失敗をなせしたか、よく反省すれば二度と同じ失敗をしないであろうし、どうすれば成功するか。の道も自然と見えてくるものである。

1 2 3 いまなんじ かま
三七、「今女画」 今汝は限る

再求が「力不足で出来ない」と言ったのに対して「それは実行した者が言う言葉だ。やらないうちからお前は諦めている」孔子の言葉。諺に「為せば成る、為さねば成らぬ、何事も。成らぬは人の為さぬなりけり」とある。人はともすれば、やってもみないうちから出来ないものと諦めるものである。

5 4 1 2 3 しょうじん じゆ
三八、「無為小人儒」 小人の儒となるなかれ

小さな物事にとらわれて大局を見失うような学者になつてはいけない。大局を見て細事にこだわらない大学者になれ、と弟子の子夏を諭した孔子の言葉。諺に「鹿を追う者は山を見ず」とも「森を見て山を見ず」ともある。つま

らない事にとらわれて、大事な事を見失いやすいものである。

1 4 3 2 ゆ こみち
三九、「行不由徑」行くに徑によらず

どこへ行くのにも、広い正道を進んで決して狭い近道は通らない。「急がば回れ」という諺がある。子游が部下の滅明という者を評した言葉。近道の徑は便利なきことが多いが危険も多い。公道は遠回りしていても、楽々と通れて安全である。急ぐ時でも、危険な近道は避けて、安全な行動を利用したほうが賢明である。

1 3 2 4 うますす
四十、「馬不進也」馬進まざればなり

戦争で退却する時、一番大変なのは一番後ろになる者である。それを殿しんがりと言って武勇の勝れた者が当った。孟子反は殿になって城に入る時に「殿になろうと思つてしたのではない。馬がのろまで後れたのだ」と言つた。普通の人なら自慢する所であるが、孟子反は武勇に勝れた人であるが、心の優しい人であるから誇ることをしなかつたのである。

1 3 2 4 6 5 ひとし うら
四一、「人不知而不愠」人知らずして怨まず

自分を理解してくれない。自分の力を認めてもらえない。そういう場合には人に恨みをいだくものだが、少しもそういう気持をもたず、おだやかに自分の道を信じて生きていく人は立派なひとである。原文は『怨』ではなくて『愠』。

1 2 4 3 くんし もと つと
四二、「君子務本」君子は本を務む

枝葉を立派にするには根を養うことが必要である。物事には枝葉のように目立つ部分と根のように目に見えない大切な部分(根本)とがある。立派な人はその大切な部分を大事にする。だから、すぐにはその結果は現われて来ないが必ずその成果が現れるのである。

1 2 3 4 5 もした みちしやう
四三、「本立而道生」本立ちて道生ず

木は根がしっかりと土の中に張れば、枝が伸び、葉が茂るように、物事は目に見えにくい大切な部分がうまく行けば、あとは自然にうまく行くものである。小人は反対で、枝葉に気を取られているから、いくら努力してもその結果が好くならない。

1 2 4 3 まな すなは こ

四四、「学則不固」学べば則ち固ならず

学問をすると、知識が広くなるので、頑固な人も考え方に柔軟性が出て来て、頑固さが取れて来る。頑固な人というのは、知識が狭いので一つの考え方にとらわれて、それ以外の考え方が出来ないからである。だから、学問をして知識が広くなると、自然に頑固さが取れるのである。

1 3 2 わ たごと

四五、「和為貴」和を貴しとなす

何事をするのにも人の和がなかったらうまく行くものではない。和は実に尊ぶべき人の道である。和とは、考え方が違っている人たちが、それぞれ相手を尊重し合ってうまくやっていくこと。他の違った意見をもよく考えて参考にすることが大切である。

2 X 1 3 5 X 4 こと びん げん つし

四六、「敏於事而慎於言」事に敏にして言に慎む

いくら口で立派な事を言っても実行しなければ価値がない。実行を敏速にして、言葉はゆつくりと慎重にするのがよい。「巧言令色少なし仁」で、口で立派な事を言う人は信用できない。人に信用されるためにも、言葉を慎み、実行に励むことが大切である。

1 2 3 まず たの

四七、「貧而楽」貧しくして楽しむ

人は貧乏だと、心まで貧しくなりがちだが、学問に励んで心を豊かにすれば、お金がなくても楽しい人生が得られる。反対に、心が貧しいと、いくらお金を手に入れても満足できず、もっとお金を求めるために心を苦しめることになる。

1 2 4 3 とみ れい この

四八、「富而好礼」富て礼を好む

貧しい人は卑屈になりがちで、反対に富んでいる人は威張って貧しい人を軽蔑しがちだが、どんなに金持ちでも威張らず、礼儀正しい人は実に立派な人ということが出来る。諺にも「実るほど頭を垂れる稲穂かな」とある。こうありたいものである。

1 2 3 4 6 X 5 じゅうゆうこ がく こころざ

四九、「十有五而志于学」十有五にして学に志す

孔子は十五歳の時に、立派な人物になろうとして学問に励む決心をした。この決心をすることを「志(こころざし)」とも「立志(志を立てる)」とも言う。「立志は成業の半ば」とも言われるように、若い時に志を立てる事が是非と

も必要である。

1 2 3 4 さんじゅう た
五〇、「三十而立」三十にして立つ

孔子は三十歳の時に、精神的にも経済的にも独立した。三十年経つと、その時赤ちゃんだった人も、赤ちゃんを持った親になる。三十年とは人間の一世代に当る年月である。故に「世」という字は、十を三つ重ねて三十年を意味しているのである。

1 2 3 5 4 しじゅう まど
五一、「四十而不惑」四十にして惑わず

孔子は四十歳の時には、心に迷いが無くなった。四十歳は人の活動期で、あれこれと迷うことの多い時代であるが、孔子は心が安定していたのである。

1 2 3 6 4 5 ごじゅう し
五二、「五十而知天命」五十にして天命を知る

孔子は五十歳の時に、天から与えられた自分の使命が何であるかを悟った。人は皆天から使命を与えられる。その使命を悟つてその実行に努めれば必ず立派な人になれる。生命いのちも天命の一つである。人の一生は天命によって決まるものだから、人の命を生命いのちというのである。

1 2 3 4 5 ろくじゅう みみしたが
五三、「六十而耳順」六十にして耳順う

孔子は六十歳の時には、何を聞いてもその話に抵抗感を感じなくなった。人の話に腹を立てたり、疑問を感じたりすることなく、すなおに受け入れられるようになった。年を取ると柔軟性を失い、怒りっぽくなる人、その反対に氣力が弱くなり、何事にも無関心になる人が多い。どちらも「耳順」とは大違いである。

2 1 3 5 4 ふる あたた あたら し
五四、「温故而知新」故きを温めて新しきを知る

過去があつて現在があり、現在があつて未来があり、つながりがある。だから、新しい考えや方法も、過去の研究が無くては生まれない。学問はすべて過去の先人の研究を学び取ることから始まり、それを十分に理解して初めてこれからどうすべきかが判つて、新しい発明や発見があるのである。

1 2 4 3 くんし き
五五、「君子不器」君子は器ならず

道具は一つの働きをもっていて、他の事に使うことは出来ない。人も同じように一つの仕事にはうまくやれても何でもやれる人は少ない。何でもうまくや

れるのが君子である。しかし、「君子は多ならず」とも言われていて、君子はあれもこれも出来る必要は無いのである。つまり、君子は無経験な事でもうまくやれるのである。

1 2 4 3 しゅう ひ
五六、「周而不比」 周して比せず

比は特定の人とだけ交わる意味。人と交わる場合、気に入った人とだけ交わる事をせず、かまね周く大勢の人と公平に交わるのがよい。自分と考え方の違う人、いろいろな人と交わって違った意見を取り入れられるのが大人物らしい所である。

2 1 4 3 6 5 7 ぎ む
五七、「見義不為、無勇也」 義を見てせざるは勇

なきなり

そうするのが正しい道であるとわかっていながら、自分の利益のために実行しない人がある。孔子はそういう人を勇氣のない人と言った。勇氣は腕力の有る無しに関係がない。正義を実行できる人が真の勇者である。孔子は「正義を実行するためには、敵が千万人あろうとも一歩も後に退かない」と言った。

3 1 2 5 4 6 たいびょう い
五八、「入大廟每事問」 大廟に入りて事ごとに問う

孔子は国の廟のお祭りの儀式には最も好く精通していたのに、一つ一つ係の者に質問して手落ちのないように努めた。その慎重さが礼の本義だということである。人はともすれば生半可な知識を頼りにいい加減な仕事をしがちであるが、孔子は常に慎重な態度でよく質問して知識を確かなものにして行ったのである。

1 2 4 3 きおう とが
五九、「既往不咎」 既往は咎めず

既にしてしまった事は、どんな失敗でも咎めるようなことはしない。これは他人について言ったものだが、自分の失敗についても言える事である。失敗は人間なら誰にでもある事、問題はその失敗を将来に役立てるかどうかの才覚にかかっている。

2 1 4 3 じん び
六〇、「里仁為美」 仁におるを美となす

人の道は仁が最も美しい。仁とは思いやりの心を中心において行う善い行いの総称。仁は“人”と“二”とで作られた字で、「人と人との間に通う」人間らし

「情」を表した字である。孔子はこの仁を最高道徳とした。

六一、「君子成人之美」 君子は人の美を成す

君子は他人の善美を見れば、それがますます善美なものになるよう手助けしてやる。君子は他人の善美も自分の善美と同じように見るからである。小人はこれと反対で、他人の善美にはけちをつけて他人の醜悪を暴くことを喜ぶものである。

六二、「政者正也」 政は正なり

政治とは正しく治まるということである。正しいということが政治の基本である。だから、政治に関する人は自分の心が常に正義から離れることが無いように戒め、特に自分の利害に関する事の処理には細心の注意をしなければいけない。

六三、「察言而觀色」 言を察して色を觀る

達人とはどういう人かを述べた孔子の言葉。人の言葉の意味を深く探ると同時に、その顔色を観察してその人の本心を知る。これが出来るのが達人である。孔子は「巧言令色は仁少なし」と言っているように、相手の言葉を吟味し、顔色を観察してその本心を見抜くことに練達していた。

六四、「慮以下人」 慮りてもつて人に下る

達人とはどういう人かを述べた孔子の言葉。注意深く先の先まで考えて物事に対処するが、言動は謙虚で先走らず、人にへり下る。先の先まで見抜く洞察力の勝れた人は決して少ないわけではないが、そういう人は謙虚さに欠ける人が多いものである。

六五、「先事後得」 事を先にし、得ることを後にす

仕事をする場合、仕事本位に考えてその報酬を考えないようにする。徳を修める方法について孔子が弟子に教えた言葉。職業を選ぶ場合にも言える。報酬の多い少ないで職業を選んだら、時代が変わって報酬が少なくなれば不満になる。仕事本位で職業を選べば、どんなに世の中が変わっても満足してやれる。

六六、「不可則止」 不可なれば則ち止む

交友についての孔子の意見。善を責め、過ちを正すのが朋友の道であるが、

1 2 6 3 4 5 くんし ひと び な

1 2 3 4 せい せい

2 1 3 5 4 げん きう いろ み

1 2 4 3 おもんばか ひと くだ

2 1 4 3 こと さき う のち

1 2 3 4 ふか すなは や



忠告は一度して、それが受け入れられなかったら、そこで止めるのが好い。黙つて見過ごすのは朋友の道に背くが、それを受け入れるか受け入れないかは相手の決める事で、それ以上に立ち入る事は朋友の道ではないのである。

2143 とも じん たす
六七、「以友輔仁」 友をもつて仁を輔く

曾子の言葉。この前に「君子は文をもつて友を会し」とある。君子は学問するために友を集め、お互いに切磋琢磨し合つて仁の徳を完成させる。友人同志の切磋琢磨がその人柄を立派にする事は、二宮尊徳翁も芋を洗うのに桶の中に入れて二本の棒をX状に結わえたものを両手で操作し、桶の水の中の芋が互いに擦れ合つて綺麗になるのに譬えている。

12435 かなら ただ
六八、「必也正名乎」 必ずや名を正さんか

弟子の子路が「政治を任せられたら何から手を付けるか」と質問したのに答えた孔子の言葉。名とは言葉。言葉の乱れを正すことが国政を正す基本だといふのである。「政は政なり」で世を正すことが政治である。人の心の乱れは言葉の乱れに顕われる。心の乱れが言葉の乱れを惹き起こし、乱れた言葉が心の乱れを強く大きくする。だから、言葉を正せば心も正しくなり、世が治まるのである。

213 こと けい
六九、「執事敬」 事を執りて敬

仕事を執り行う時には、それが些細な事でも大事を行うような慎重さが必要である。孔子の言葉。仕事の重要さは本来その仕事の大小に関係が無い。多少大小に関らず、過ちの無いように常に慎重でなければならぬ。大事は慎重に、些事さじはいい加減で好い、というものでは無いのである。

2143 おのれ おこの はじ
七〇、「行己有恥」 己を行うに恥あり

「どうあれば士と言えるか」という子貢の問に答えた孔子の言葉。自分の言動に対して恥を知る者ならば士と言つて好い。士とは、イギリスの紳士に当る。恥を知る者は自己の短所を矯め、長所を伸ばすことに熱心である。故に恥を知る者は、現在至らない所があつても、将来は期待できる。

123 げんかなら しん
七一、「言必信」 言必ず信あり

子貢に答えた孔子の言葉。口にする言葉は常に真実で信頼できる。そういう信頼の出来る人なら士と言つて好い。中国ではそのような人物の手本とし

て「季布」^{きよふ}「候嬴」^{こうい}はいつの世でも人の口に上り、尊敬されている。季布は一度引き受けた事は必ず実行したので、「黄金百斤を得るよりも、季布の一諾を得るにしかず」という諺が生まれた。

1 2 3 おこな かなら は

七二、「行必果」 行い必ず果たす

子貢に答えた孔子の言葉。実行を始めた事は、どんな場合でも必ずやり遂げる。そういう人なら士と言っても好い。どんなに易しい事でも最後までやり遂げる人は少ないものである。然し、やろうと思つて始めた事を途中で止める事は、自ら自分を傷つける行為である。

1 2 3 4 6 5 くんし わ どう

七三、「君子和而不同」 君子は和して同ぜず

君子は人それぞれの考え方や生き方を尊重して、違いを乗り越えて仲良く調和してやって行き、相手に自分の考え方や生き方と同調することを求めない。音楽でも、異なった音でも調和して同一の音よりも深い味わいのある音声が出た場合、これを和音、または和声と言う。歌唱でも斉唱よりも合唱の方が勝れた音楽効果がある。

1 2 3 4 6 5 しょうじん どう わ

七四、「小人同而不和」 小人は同じて和せず

小人は君子と反対で、考え方や生き方が自分と同じ人とは仲良くするが、違った人たちと仲良く調和して行くことは出来ない。また初めは同調していても、細部に違いを生ずると、それにこだわつて忽ち調和が崩れ、互いに非難し合い攻撃し合つて仇敵の關係に一変する。

1 2 3 4 6 5 くんし ゆたか おご

七五、「君子泰而不驕」 君子は泰にして驕らず

君子は自ら信ずる所が篤いので、常にゆつたりと余裕のある態度を保っているが、それは決して驕慢ではない。驕慢の人は余裕が無いのにえらぶつて余裕があるように見せかけているのだが、君子の余裕ある態度は自然とそうなるのであるから、見かけは同じようでも根が違ふから区別できる。

2 1 4 3 り み おも

七六、「見利思義」 利を見ては義を思う

利を見れば直にこれを手に入れようと思つてはいけない。その利が道義になつていくかどうかをよく考へて、道義にかなわない利は取るべきではない。心の目を常に見開いていれば道義にかなうものかどうかは直に判るが、心の

目が閉じていると、道義が見えなくなり、善悪の判断をする事なく、思わず利に手を出してしまふ。

1 2 3 4 5 6 7 8 くんし じょうたう

七七、「君子上達、小人下達」 君子は上達し、

しょうじん かたう

小人は下達す

君子は仕事を一つし終える度に一步一步確実に向上して行くが、小人はその反対に一步一步墮落していく。君子は仕事の軽重に関らず慎重に処理するので、その能力が十分に發揮され向上して行く。小人はその慎重さが無いので失敗する事が多く、自信を喪失するに至るのである。

3 2 1 6 5 4 てん うら ひと こと

七八、「不怨天、不尤人」 天を怨まず、人を尤めず

一途に実現を目指して最善を尽くすだけで、成否はどうでもよいのである。だから、うまく行かないと言って天を怨んだり、人を責めることは無い。諺にも「人事を尽して、天命を待つ」とある。成否は天命にあると考え、然し最善の努力だけは怠りなくする事が望ましい。

2 1 5 4 3 みち はか しよく はか

七九、「謀道不謀食」 道を謀りて食を謀らず

人の道をどのように行うかについては心を尽して考えるが、生活費をどうして得るかについては深く考えない。現在は、どんな職業でも真面目に働けば生活費に悩む必要が無い。だから、自分の能力に適した、自分がやりたくてやりたくてたまらない仕事を見付け、それで自分を伸ばし、社会にも貢献することが望ましい。

1 2 X 3 X じ たう

八〇、「辞達而已矣」 辞は達のみ

言葉は自分の意志を相手に伝達するのが目的であるから、伝達できたら十分で、それ以上は蛇足である。この頃は携帯電話が盛んに使われていて、その使用の自制が求められているが、この場合でも「辞は達のみ」という言葉が解決の鍵になるであろう。

1 2 3 4 し のち

八一、「死而後已」 死して後やむ

自分の任務は生きていく限りは絶対に放棄しない。死んでそこで任務から放れるのである。誰でも良いと思う事は実行するものである。しかし、長続きしない者が多い。ことに結果が思うように現われない場合は途中で止めてしまいがちである。一旦やろうと決心した事は最後までやり抜きたいもので

ある。

2 1 4 3 6 5 8 7 い ひら
八二、「母意、母必、母固、母我」意なく必なく

こ が
固なく我なし

意は先入観の意味。必は是が非でもという気持。固は自分の考えを固執して変えないこと。我は自己中心の心。孔子はこの四つの心を起ささないよう戒めたという。人は先入観に左右されがちである。赤い色眼鏡を掛ければ何でも赤く見えるようなもので、物事を正しく判断でき難い。

1 2 3 X 4 くんし た
八三、「君子多乎哉」君子は多ならんや

君子とは徳の高い人と言う言葉であって、多方面に才能が勝れている人には関係がない。君子は多能である必要は無い。だから学校でも、すべての学科に勝れているわけではない問題にすべきではない。高い品性の人間になるように努力することの方が重要である。

1 X 2 3 あお たか
八四、「仰之弥高」仰げばいよいよ高し

顔回が孔子を歎美して言った言葉。孔子は接すれば接するほど、仰ぎ見れば見るほど、ますます高く見えて来る。たいていの人には、初めて接した時には立派な人だと思われ人でも、時が経つにつれて欠点が一つ二つと次第に見えて来て、初めに思ったほど立派だと思えなくなるものである。

1 2 3 4 や や
八五、「止吾止也」止むはわが止むなり

成功を目前に止めてしまうのは、自分の意志が弱くて諦めてしまうからである。理由はよそにあるのではなくて、自分にある。ところが、何かと理由を付けてそのせいにしたがる人が多い。それは卑怯な態度であり、そういう態度だと何をやっても必ず途中で諦めてしまうに違いない。

1 2 4 3 こうせい おそ
八六、「後生可畏」後生畏るべし

自分より後の若い人はこれからの長い人生にどれだけ立派な事をするか、計り知れないほど畏るべきものがある。孔子が若い人たちの努力を期待して言った言葉。若い人は今は頼りなく見えても、決して軽く見くびってはならない。また、期待すればその期待に答えて立派になるものである。

1 2 4 3 ちしや まど
八七、「知者不惑」知者は惑わず

どんなに難しい問題でも惑うことなく解決できる人、それを知者(賢い人)と言う。惑うとは、「こうしたら良いのだろうか、それともああした方が良いのだろうか」とあれこれ思い悩んで心を決めかねること。いくら知識が多くあっても、実践力の弱い人は知者とは言えないのである。

1 2 4 3 じんしゃ うれ
八八、「仁者不憂」 仁者は憂えず

仁者は自分の徳を磨くことだけを考えて、私利私欲が無いから、悩みや心配することが無い。地位や名誉やお金を求めようとすれば悩みや心配が絶えないが、仁者にはそのような気持が全く無いので心を悩ますことが無いのである。だから、「仁者は命長(寿)し」と言つて長命なのである。

1 2 4 3 ゆうしゃ おそ
八九、「勇者不懼」 勇者は恐れず

勇者とは、正義に立ち、正義を守り抜く心を強く持った人。だから、どんな障害に出会つても恐れずに立ち向かう。孔子は「自ら反省してみて正しいと信じられる時には、反対者が千万人いても恐れずにそれに立ち向かうが、正しいと思えない時には相手がどんなに弱い者であつても恐れずにはいられない」と言っている。

2 1 4 3 とき
九〇、「不時不食」 時ならざるは食せず

孔子は食事を大切にし、時期のはずれた食べ物は用心して食べなかった。また、食事時を正しく守り、勝手な時間に食べなかった。時期の物は栄養が豊富でしかも手に入れ易いが、時期の外れた物は栄養が乏しく、しかも手に入り難いので高価になる。また、食事時を正しく守ることは健康上大切なことで、だから孔子は長生きしたのである。

1 2 X 3 い かなら あた
九一、「言必有中」 言えば必ず中る

弟子の関子騫を評した孔子の言葉。「あの男はめつたに発言しない。しかし、発言した時には実に適切な発言をする」と評した。関子騫は孔子の門下で特に德行に勝れた四人の弟子の一人である。孔子は言語に勝れた弟子の宰予や子貢よりも、無口で德行に勝れた関子騫や顔回を愛した。

2 1 4 3 おのれ か れい かせ
九二、「克己復礼」 己に克ちて礼に復る

自分の欲望をおさえて、社会のきまりを重んずる。礼は社会人としての行動の基準とすべきもの。顔回が仁について質問したのに対して孔子が答えた時の言葉である。「仁とは己に克ちて礼に復るといふことだよ」といつて、さら

に、「仁をなすは己による」と教えたのである。

2 1 4 3 じん おのれ

九三、「為仁由己」 仁をなすは己による

仁の道はこれを行おうと思えば誰にでも行えるもので、決して難しいものではない。自分の決心次第である。弟子の顔回の質問に答えた時の言葉である。「己による」とは、「自分の意志次第である」という意味である。意志が弱かつたらどんなに易しい事でも出来ないが、意志さえ強ければどんなに難しいことでも出来るのである。

1 2 4 3 しせい めい

九四、「死生有命」 死生命あり

人は死ぬも生きるも天命で決められているものであり、人のどうすることも出来ないものである。だから、生き死にの事は天命に任せて、この問題でよくよと悩んだり苦しんだりするのは無駄な事であると思うべきである。

1 2 4 3 ふうきてん

九五、「富貴在天」 富貴天にあり

人が金持ちになり、位が高くなるのも、反対に貧しくなり、身分が賤しくなるのも、天命で定められたものであり、人の力ではどうすることも出来ないものである。だから、いくら金や地位が欲しくても、それを忘れて、自分の任務とするものに専念することが大切である。

2 1 4 3 しん た

九六、「無信不立」 信なければ立たず

信は社会存立に欠くことの出来ない徳であるから、もしもこれが無ければ、社会は崩壊し、人は一刻もこの世の中に生きていることが出来ないであろう。だから、人間として一番大切なものは信の徳であるという事が出来る。誰からも信頼される人になるよう心がけるべきである。

1 4 3 2 し した およ

九七、「駟不及舌」 駟も舌に及ばず

一度口から出た失言は、四頭立ての馬車で追いかけても追いつけない。「失言は取り返しがつかないものだから、十分に気を付けて話さない」という意味の言葉である。

1 2 3 4 ちちらち こころ

九八、「父父、子子」 父父たり子子たり

齊の景公が孔子に政の相談をした時の孔子の返答。父が父らしくあり、子が子らしくあり、同じように皆の人が皆それぞれにふさわしい言動をするなら、社会は自然と立派になる。父が父らしくなく、子が子らしくあり、同

じように皆の人が皆それぞれにふさわしい言動をするなら、社会は自然と立派になる。父が父らしくなく、子が子らしくなかったら家は治まらない。

3 2 1 だく とと

九九、「無宿諾」 諾を宿むることなし

子路のことを述べた言葉。子路は承知したと返事した事はすぐさま実行に移して、放っておくことは決してしなかった。一度しようと思つた事はすぐさま実行に移すのが好い事に決まつているが、なかなか出来る事ではない。諺に「今日為し得る事を明日に延ばすことなかれ」とある。

1 3 2 4 5 6 X あした みら き

百、「朝聞道、夕死可矣」 朝に道を聞けば、

夕べに死すとも可なり

朝、人の道を聞いてそれが理解できたとしたら、その夕方に死んでもよい。孔子の言葉。人の道を求める気持の強いことがよく解る言葉である。人間は「唯、生本能に従つて生きる為に生きる」動物ではなくて、「真理を求め理想を追つて生きる」動物である。だから、そこに到達できたらいつ死んでもよい、と思うのである。

1 2 3 6 4 5 おほ いま とお あそ

百一、「父母在、不遠遊」父母在すときは、遠く遊ばず

父母が生きている間は、遠い旅には出ないように努める。父母に心配を懸けるからである。父母の使命は、我が子を自分たち以上に立派な人間に育てる事が第一であるから、心配も我が子に対する心配ほど強いものはない。その気持を推し量つて親に心配を懸けぬよう努力する事が、子としての責務である。

1 2 3 4 8 7 6 5 X おほ とし

百二、「父母之年、不可不知也」父母の年は、

知らざるべからず

父母の年齢はいつでも知っていなければならぬ。長生きを喜ぶと共に、余命が少なくなることを考えて、親孝行に努めなければならぬからである。昔から「いつまでもあると思うな親と金」と言われているように、親と金とは「いつまでもあればよい」という願望が「いつまでもあるような気持」にさせ、その結果「孝行したい時には親は無し」という事になる。

1 2 3 4 5 6 7 8 9 X およ

百三、「過猶不及」過ぎたるはなお及ばざるがごとし

何事にも程好い「度」というものがある。足りないのもいけないが、度が過ぎるのもいけない。孔子が子貢の質問に答えた時の言葉。子貢が「子張とどこちらが賢いか」と問うと孔子は「子張は賢過ぎる。子夏は足りない」と答えたので、「では子張のほうが賢いのですね」と言うのと、孔子は「過ぎていいるのは足りないのと同じ様なものだ」と答えたのである。

1432 76X5 おのれ ほつ ところ
百四、「己所不欲、勿施於人」己の欲せざる所、

ひと ほんじ
人に施すことなかれ

自分がいやだと思ふ事は、人にやつてはいけない。これは対人関係において最も大切な心構えである。しかし、「自分が好きだと思ふ事は人にやつてやりなさい」という態度は必ずしも好いとは言えない。好き嫌いは人によつて違ふので、嫌いな事の押し付けになり、有難迷惑になる事があるからである。「逆は必ずしも真ならず」はこの諺にも当てはまる。

12543 あやま すなは あらた
百五、「過則勿憚改」過ちては則ち改むるに

はばか
憚ることなかれ

過ちは人間には当然ある事であるから、過つたからと言って悲観する事は無い。過ちと判つたら直に改め、二度とその過ちを繰り返さなかつたら立派なものである。それに、普通過ちをする事で賢くなるのであるから、過ちを全くしない人間は未熟で頼りない人間とも言えるのである。若いうちはどんどん失敗して賢くなつたほうが好い。